

[特別活動]

小学校高学年における発言意欲を高める取組

堀 正人*

1 はじめに

(1) 今日の課題から

文部科学省の「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ」によれば、特別活動の現行学習指導要領の成果として、児童生徒が学校生活を送る上で基盤となる力や社会で生きていく力を育んできたと述べている。さらに、学級会で児童自治的な話し合いができていると感じる児童ほど、全ての教科における平均正答率が高いというデータがある。また、集団への所属感を高める特別活動は我が国の教育課程の特徴として海外からも高い評価を受けている。

一方で、上記の審議のまとめには現代の課題として「社会参画への意識の低さ」が挙げられている。それに対し、特別活動としては「複雑で変化の激しい社会の中で求められる能力を育成するという視点」をもつ必要性があり、具体的な改善策の一つとして、「主体的・対話的で深い学びの実現」があると述べられている。確かに学校現場において、学習活動への意欲が低かったり、友人とのコミュニケーションにおいて問題を抱えたりしている児童は少なくない。新潟県教育委員会も「平成29年度学校教育の重点」において、「主体的・対話的で深い学び」の実現による「学ぶ楽しさ」「分かる喜び」を実感できることを強調している。そのような点から、現在の小学校段階における主体的・対話的に学ぶ態度やスキルの向上は、生涯にわたって主体的に社会に参画していく子どもを育成するために不可欠であると考えられる。

(2) 児童の実態

上記の現状を踏まえた上で本学級の実態を述べる。本学級は、6年生男子11名女子14名計25名の学級であり、5年生時からの担任である。学級の特徴としては、温厚な児童が多く、和やかな雰囲気がある。

しかし、子どもたちの心の発達もあり、これまでであれば発言できる場面で発言しないという姿も見られるようになってきた。休み時間ではこれまでと変わらず誰とでも会話を楽しむ姿が見られている。上記の今日の課題の視点から、たとえ休み時間等私的な時間におけるコミュニケーション能力が高いとしても、集団活動など公的な時間におけるコミュニケーション能力や態度・スキルを充実させていかないと主体的・対話的な学びは生まれない。文部科学省「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ」の「主体的・対話的で深い学びの実現」においても、多様な他者との集団活動を基本とし、合意形成を図ったり、意思決定をしたりする中で、他者の意見に触れ、自分の考えを広げたり、課題について多面的・多角的に考えたりすることが可能となると述べられている。そこで、児童の発言意欲を高めるための具体的方策を考え、実践した。

2 研究の目的

児童一人一人が進んで自分の考えを伝えられる学級集団を具現化するために、発言できない原因に応じた方策を講じることによって児童の発言意欲が高まることを、実践を通して検証する。

3 研究の内容と方法

(1) 対象 小学校6年生児童25名(男子11名 女子14名)

(2) 実施期間 平成28年7月～平成28年12月

(3) 検証方法

児童が発言できない原因をもとに発言意欲を高める手立てを講じることを通して、児童の発言意欲が高まることを、

* 長岡市立神田小学校

7月と12月における児童アンケートの比較や児童の様子から検証する。

4 実践の概要

(1) 児童アンケートの実施

7月時点において、今後有効な手立てを講じていくために、児童の発言意欲や発言に対する考えを把握すべきであると考え、アンケートを実施した。結果は以下の通りである。(欠席1名により24名実施)

表1. 発言意欲に関わる児童アンケートの結果

質問	4 (当てはまる)	3 (およそ当てはまる)	2 (あまり当てはまらない)	1 (当てはまらない)
学級全体の場で進んで発言している	7人 (29%)	7人 (29%)	9人 (38%)	1人 (4%)
班で進んで発言している	10人 (42%)	11人 (46%)	3人 (12%)	0人 (0%)
ペアで進んで発言している	14人 (58%)	8人 (33%)	2人 (9%)	0人 (0%)
友人の発言内容が理解できている	15人 (63%)	7人 (29%)	1人 (4%)	1人 (4%)

ペアや班では、発言することに対する肯定的な回答が9割であるのに対し、学級全体の場では6割程度であった。また、聞く力についての問いでは、肯定的な回答は9割であるものの、自信をもっているのは6割程度であった。「全員の前で言いたいことが言えない雰囲気があること」「聞くことに関しても意識するべきであること」という状況であると考えた。

表2. 発言意欲に関する児童アンケートの自由記述（個人の複数記述可、カッコ内は人数）

自由記述	児童の回答
全体の場で発言しづらい理由	<ul style="list-style-type: none"> ・正解しているか不安。(9) ・勇気が出ない、恥ずかしい。(4) ・考えていることが少ないとき。 ・間違ったら悲しい。(5) ・どうやって伝えればいいかわからない。(2) ・みんなの反応がないときがあるから。
全体の場で発言しやすいとき	<ul style="list-style-type: none"> ・自信があるとき。(8) ・前に発言した人に関連して発言するとき。似ている意見が出たとき。(4) ・賛成、反対など先生が発言するテーマを決めてくれたとき。(2) ・みんなが反応してくれているとき。(2) ・ペアで話し合った後に発言するとき。 ・自分が言いたいことを言われていないとき。 ・先生が「〇〇さんの縦の列発言してください」と言ったとき。 ・簡単な問題のとき。(5) ・班の代表として話すとき。(2) ・考えていることが多いとき。 ・面白い問題のとき。 ・〇つけのとき。
全体の場で発言しやすくするにはどうしたらよいか	<ul style="list-style-type: none"> ・発言した人に対してうなずいたり、言葉で反応したりする。(5) ・みんなが発言すると自分も発言しやすい。(2) ・みんなが恥ずかしがらない。(2) ・自然体に授業をする。 ・先生が一つ例としての意見を出す。 ・難しい問題のとき先生がヒントを出す。 ・自信を付ける。(2) ・相談してから発表する。(2) ・考える時間をつくる。 ・みんなでほめる。

今泉(2005)は、学年が上がるにつれてだんだんと発言が少なくなっていく理由を「間違いや失敗を恐れているから」と述べている。自由記述から本学級の児童も、やはり発言することに対する不安を理由とする児童が多かった。個人として自信を付けていく必要があると感じた。また、発言した後の周囲の反応に関わる記述も多く、学習集団として聞き方の改善を行うべきであると感じた。さらに、「先生が一つ例としての意見を出す」「賛成、反対など先生が発言するテーマを決めてくれたとき」など、教師の指導法に関わる意見も多かった。発言意欲を高めるキーワードとして「児童一人一人の発言力の向上」「発言しやすい学級集団づくり」「教師の授業改善」の三つを掲げ、手立てを講じていった。

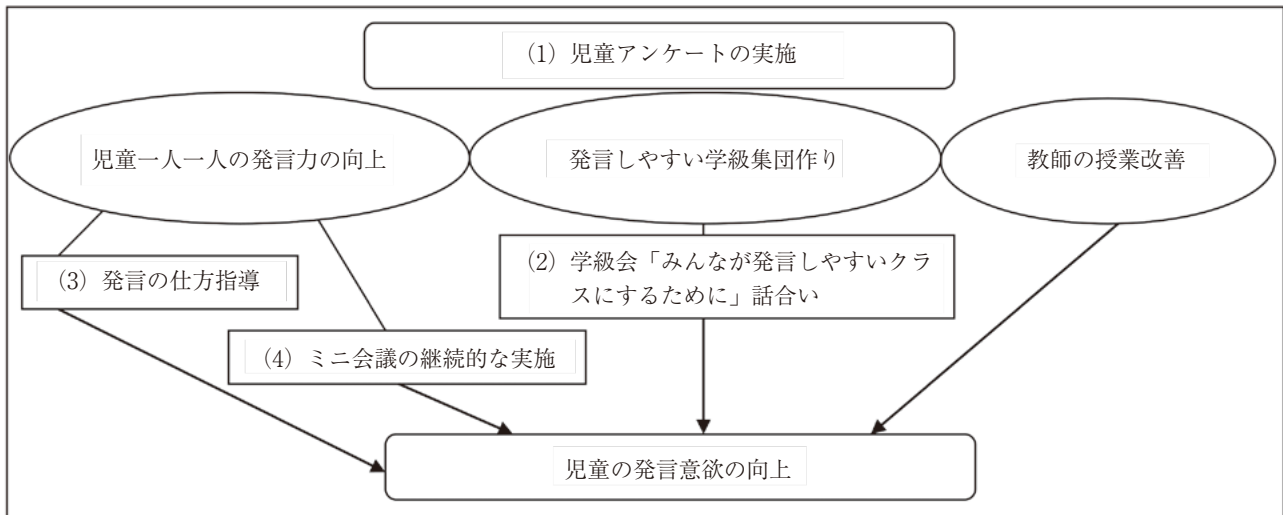


図1. 本研究における実践イメージの全体像

児童の実態とアンケート結果から、(2)「みんなが発言しやすいクラスにするために」の話し合いで学級の課題意識を高めた上で、話す力の基礎となる(3)「発言指導」と、話すことに慣れる(4)「ミニ会議」を組み合わせる取り組みことが、「児童一人一人の発言力の向上」「発言しやすい学級集団づくり」の達成につながると考えた。本研究では、「児童一人一人の発言力の向上」「発言しやすい学級集団づくり」に関わる3つの方策を述べる。

(2) 学級会「みんなが発言しやすいクラスにするために」での話し合い

赤坂(2013)は学級づくりにおいて「課題解決集団を目指すことによって、良好な関係性を構築できる可能性が高くなる」と述べている。表1のアンケートで分かった話すこと・聞くことに関する課題の解決策を考える学級会を実施することで、児童同士の関係性がより良いものになり、「発言しやすい学級集団づくり」につながると考えた。縦割り活動や委員会など全校という視点で最高学年としての振る舞いに意識が向く状況が続いた中、一段落した7月に自分たち自身の課題に目を向ける機会を与えることは、時期的にも最良のタイミングであると考えた。

まず表1で示したようにアンケート結果を児童に示し、「発言しづらいという人が4割いること」「友人の発言内容をはっきり理解できている人は6割であること」という現状を伝えた。児童同士の仲が良い素晴らしい学級であることを認めながら、「2年間共に学んできた学級としてこのままの状態卒業するのではなく、さらによい6年2組をみんなで目指し、全員で成長していかないと、教師の思いを伝えた。よりよくしていきたいと反応する児童に対し、どのように解決していくかを伝えると、話し合いが始まり、児童が出す意見を教師が板書していった。話し合いの結果として、大きく「発言しやすい雰囲気をつくるために改善できることは何か」「話し方・聞き方の確認」の二つについて望ましい具体的な姿のイメージを出し合った。

① 話し合いの様子

「発言しやすい雰囲気をつくるために改善できること」では、「間違ったらいけないという雰囲気を無くすべき」という意見が第一に出た。そのために、授業中の話し合いで反論または間違いを指摘するときは「強い口調で否定しない」ことと、温かい言葉を心がけることにまとまった。その後、「話し手に反応することが必要」という意見のもと、言葉やジェスチャーでの相づちについて話し合いが進んだ。「言葉やジェスチャーの相づちはすべきであるが不自然にならないようにしないといけない」という意見に対し、クラス全体が様々な相づちを自然に動作で示し、和やかな様子が見られた。解決に向けた話し合いに多少の緊張感が生まれていた中、温かい雰囲気が進むきっかけとなった。「相づちのやり方は多いからしっかりと知るべき」という意見では、「うんうん」「おお～」など多くの言葉の相づち例が出て、全体で真似ながら楽しんでいった。

ジェスチャーによる相づち例では、「首を動かすこと」ことから「広げた手を握りこぶしで叩くポーズはテレビで見たことあるよ」「指を鳴らしながら言葉で反応するのも面白い」などの意見が述べられ、実践する姿が見られた。「言葉での相づちがどうしても恥ずかしくて出来なかったとしても、ジェスチャーならできるんじゃないかな」と、苦手な立

場の友人を考慮した発言も見られた。相づち以外の意見については「隣の人のノートを見てよい意見だと思ったら、温かい言葉で発言を薦める」「やっていることをやめる」など、話し手が気持ちよく話せることを意識した聴き手の振る舞いに関わる意見が多く出た。

「話し方・聞き方の確認」の話題では、話し方について「全体に聞こえる声で話す」という基本的なものから、「長くなり過ぎると理解しづらから、なるべく短い言葉で話す」という高学年らしい意見も出た。聞き方については、「相手の方を見る」「聞こえなかったら、その場で話し手にもう一度言ってもらおう」などの意見を全体で確認した。

話し合い終了時は、2つのテーマの話し合いにより、黒板が児童の意見で埋め尽くされた。児童自身が今後の在り方にかかわり真剣に意見を出し合ったことで、学級として長期的に取り組む雰囲気が出来上がったと考える。

② 実践後の様子

話し合ったことを常に意識できるよう、紙にまとめることを提案し、児童が書いた内容を掲示した。辰野(2009)は、「雰囲気やきまりが学級で行われる子どもの学習に影響し、学級内の子どもの意欲を高めたり、低めたりする」と述べている。話し合いで出た意見を進んで実践する児童を中心に、学級全体で課題に取り組もうとする前向きな雰囲気が生まれた。担任は、意図的に実践しようとする児童を褒め、学級の目標を後押しする雰囲気づくりを行った。少し緩みがあると感じた際は、目標に立ち返らせることで課題へ取り組む意義を確認した。このように、日々意識して取り組むことを通し、発言しやすい雰囲気が生まれたと考える。

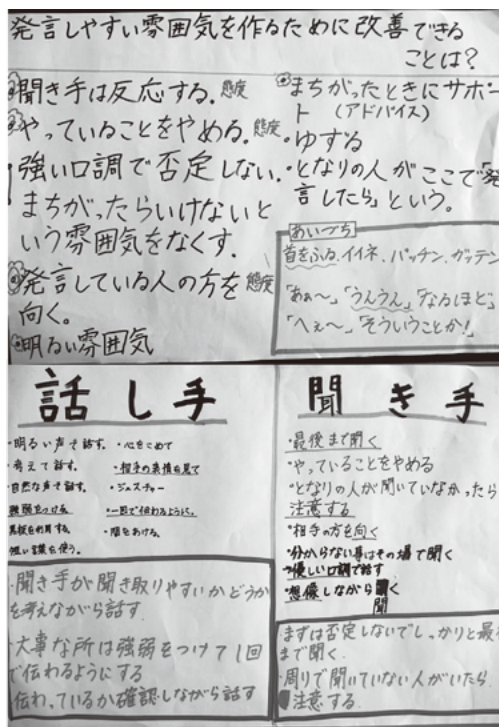


写真1・2. 児童が作成した掲示物

(3) 発言の仕方プリントを用いた継続指導

児童アンケートの結果から、改めて発言の仕方について指導する必要があると考えた。これまでは、教室に掲示したものを適宜指導するという方法であったが、学級会からの前向きな雰囲気もあり、継続して取り組む場を設定したいと考えた。そこで右図のような発言の仕方プリントを用いて、毎日の朝の会で音読することを行った。児童には、「学級会を経て、クラスで取り組む課題に先生も力になりたいということ」「話し方を知っておくことは現在だけでなく、中学以降の学習にも生きてくること」を伝えた上で提案した。

全員で一斉に読んだり、ペアで読んだり毎日パターンを変えながら読むことを続けた。音読という単純さが朝の活動として適切であったようで、毎日の学習を始める前の簡単なウォーミングアップとして児童も抵抗なく続けることができた。続けているうちに、授業において児童が実際に使う場面が見られた。児童が「今の言い方は紙に書いてあったものだね」と話すなど、毎日プリントを読むことが発言することへの前向きな雰囲気を生んだと考える。

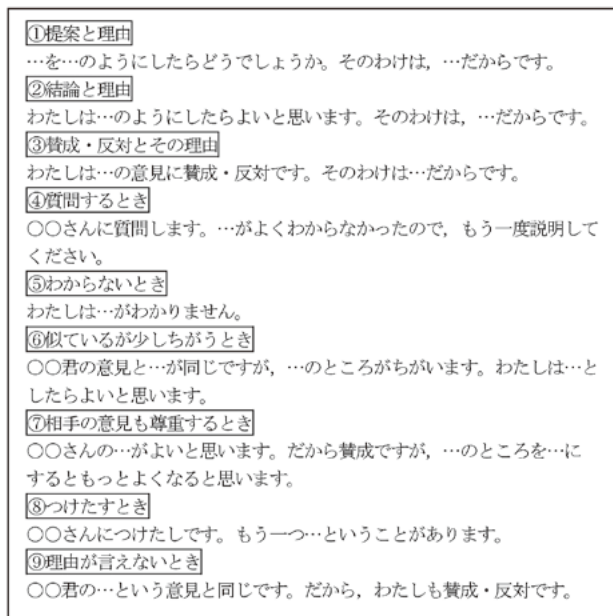


図2. 児童に配布した発言の仕方プリント

(4) 発言の機会を増やす「ミニ会議」の継続的な実施

① 方法

発言することが肯定的に認められる土壌ができつつある中、「恥ずかしいけど、全体の場の発言に挑戦したい気持ちはある」児童が、自分の意思で一歩踏み出せる場作りが必要であると考えた。そこで、毎日の朝の会に学級会「ミニ会

議」を取り入れた。赤坂（2015）は、「毎日クラス会議で話し合うことにより、学級に支え合う雰囲気ができ、学級への所属感や信頼感、貢献感を一人一人が感じられる」と述べており、この良さも生かしていきたいと考えたからである。1日の始まりである朝の会に行くこともあり、「気軽さ」「明るさ」を大事にしたい。テーマは「低学年が掃除をまじめにやってくれる方法」という日々の悩みから、「うどんとそばどちらがよいか」という遊び要素のあるディベート的な内容まで自由とした。児童にミニ会議を提案する際の意義の説明として、「最良の答えを出すこと」が目標となると、気軽さが失われて発言することに対する児童の重荷になると考えた。「発言の機会のあること」も同じ理由で児童には伝えないこととした。そのため、ミニ会議の意義を「テーマに対してみんなで気軽にいくつかのアドバイスをする感覚」「朝にやる授業への準備体操」と児童に提案したところ、快い反応が見られた。授業に差し支えないこと、さらに話合いが間延びしないことを考慮し、制限時間を3分間と設定した。司会と板書は日直の役割とした。学級全体を見て指名したり、柔軟に意見を募ったりすることが、発言する力を高める経験になると考えたからである。児童の自主性を高めることやより気軽な話合いにすることをねらい、教師は基本的に話合いに介入せず、児童の意見にうなづく程度で見守ることとした。

② 実践の様子

最初の1週間はテーマ設定や司会、板書を教師が担当してミニ会議を実施した。テーマが話しやすい内容であるため、短い時間でも3分の1程度の児童が挙手して意見を述べた。特に「うどんとそばどちらがよいか」など遊び要素のあるテーマが盛り上がり、半数近くの児童が挙手して意見を述べることもあった。

日直に司会と板書の役割が移ってからも、気軽な雰囲気の中で会議が行われた。最初のうちは司会と板書を同時に行うことに慣れない児童もいた。しかし、「今の意見は〇〇と省略して黒板に書けば時間がかからないよ」などのアドバイスで日直を見守る温かい雰囲気ができたため、役割を分けることは見送った。テーマは児童の公募から日直が選ぶ形となったことで、テーマによっては多くの意見が出ないこともあったが、毎日行う中で児童同士の中で少しずつ改善していくことをねらい、細かな指導はせずに授業へと切り替えた。継続して行う中で、普段積極的でない児童も挙手して発言する姿が見られた。挙手している児童が多い際は、一人一人が短い言葉で話し、テンポよく発言者が変わっていった。時間内に多くの方が発言できるよう意識している様子が見られ、発言しやすい雰囲気をつくろうとしている集団としての変化が感じられた。

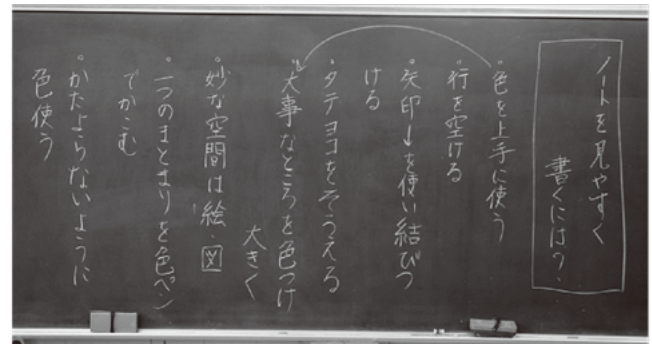


写真3. ミニ会議後の板書例

5 成果と課題

12月時点に行ったアンケート結果は以下の通りである。（欠席1名、転出1名により23名実施）

表3. 発言意欲に関わる児童アンケートの結果

質問	4 (当てはまる)	3 (およそ当てはまる)	2 (あまり当てはまらない)	1 (当てはまらない)
学級全体の場で進んで発言している	5人 (21%) 2人減	14人 (61%) 7人増	4人 (18%) 5人減	0人 (0%) 1人減
班で進んで発言している	18人 (78%) 8人増	5人 (22%) 6人減	0人 (0%) 3人減	0人 (0%) 変化なし
ペアで進んで発言している	16人 (74%) 2人増	7人 (26%) 1人減	0人 (0%) 2人減	0人 (0%) 変化なし
友人の発言内容が理解できている	15人 (65%) 変化なし	8人 (35%) 1人増	0人 (0%) 1人減	0人 (0%) 1人減

(1) 成果

学級全体・班・ペアすべてにおいて7月を上回る肯定的評価となった。学級全体の場で進んで発言している（4の回答）は微減したものの、肯定的評価は6割から8割まで高まった。さらに、否定的評価であった10人のうち7人の数値が高まった。班やペアにおいては、全ての児童が肯定的に評価した。授業中においても、話合いが多くの意見で盛り上

がったり、発言に消極的な児童が挙手したりすることが増えた。

自由記述からは、全体の場で発言しやすい雰囲気をつくるために必要なことについて、「聞き手が反応するなど、話しやすい雰囲気をつくる必要がある」という意見が、7月の倍以上に増えた。今泉（2005）は「子どもたちがひとつのことをめぐって考え合ったり、討論がまき起こったりするときには自然に緊張（良い内的緊張）がつくられていく」「良い内的緊張を生むためには、授業中におけるリラックスした学級の雰囲気が必要」と述べている。本学級の児童もその実態に近づいたと考える。

授業外においても、児童同士の話し合いが活発になった。毎年行われるドッジボール大会に向けた学級会では、学級委員が司会を務め、多くの児童から意見が出た。練習期間中は、児童の要望により短い時間での作戦会議が繰り返し行われた。大会の結果自体も昨年度よりよいものとなり、児童も自分たちの頑張りに満足して終えることができた。転出児童が分かったときは、その児童に分からないよう児童たち自身でお別れ会の会議を進めた。多くの意見を出し合い、素晴らしい会を実施することができた。これらの児童の成功体験は、本研究の課題にクラス一丸となって取り組んできた成果であると考えられる。さらに、どちらの例においても、話し合いにおける教師の介入がほとんど必要なく、継続的な方策の実施が児童たちの話し合いの質を高めていったと考える。



写真4. 転出児童のお別れ会に向けた話し合い

(2) 課題

意欲の高まらなかった児童への方策が課題である。今回の実践を経て、評価が高まらなかった児童は3人いた。それらの児童に共通することは、学習に苦手意識があること、普段から遠慮がちで物事を否定的にとらえやすいことである。学習に関しては、易しい問題など発言しやすい場面で指名したり、挙手した場面において大いに褒めたりするなど、意図的にそれらの児童を意識した言動を教師が増やす必要があると考えた。マイナス思考が目立つ部分では、毎日気持ちよく過ごしていくために、物事を前向きに考えたり、マイナス言葉を減らしプラス言葉を増やしたりすることのよさを教師から伝えていくことが大事であると考えた。

また、今回の方策は課題を児童たち自身に自覚させることを中心としたが、発言を苦手とする児童にとっては精神的に負担があったことが予想される。それらの児童に対しては、5年生からの担任という関係性であることを差し引いても、教師の励ましやフォローが重点的に必要であると感じた。

6 終わりに

実際に取り組んでみると、「学級の明るい雰囲気」が児童の発言意欲を引き出す大きな要因であると強く感じた。そのために最も重要な事は、児童個人、教師、学級集団が三位一体となって課題に取り組むことである。学級集団の気運が高まると、「発言することに不安を感じない児童」「ユーモアな発言で学級を盛り上げる児童」「温かい言葉をかけられる児童」が最大限に力を発揮し、多くの児童の意欲的な発言と自信を引き出すと実感した。教師自らも「課題解決のために努力している」という気持ちを、言葉と行動で明確に伝えることが、児童の共感を呼び、望ましい言動を引き出すと考える。

引用・参考文献

- ・赤坂真二 『学級を最高のチームにする極意』（明治図書、2013）
- ・赤坂真二 『自ら向上する子どもを育てる学級づくり』（明治図書、2015）
- ・今泉博 『どの子ども発言したくなる授業』（学陽書房、2005）
- ・教育技術4月号 『CD「高学年の話し方ポイント」』（2013）
- ・辰野千壽 『科学的根拠で示す学習意欲を高める12の方法』（図書文化、2009）
- ・新潟県教育委員会 『平成29年度学校教育の重点』（2017）
- ・文部科学省 『次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ』（2016）
- ・文部科学省 『小学校学習指導要領解説 特別活動編』（東洋館、2008）